

公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律及び地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律

(公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律の一部改正)

第一条 公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律(昭和三十三年法律第百十六号)の一部を次のように改正する。

第三条第二項の表小学校の項中「四十人」の下に「(第一学年の児童で編制する学級にあつては、三十人)」を加える。

第四条中「に従い」を「を標準として」に改め、「地方公共団体の教育委員会が」の下に「、当該学校の児童又は生徒の実態を考慮して」を加える。

第五条の見出し中「の同意」を「への届出」に改め、同条中「について、あらかじめ」を「を行ったときは、遅滞なく」に、「協議し、その同意を得なければならない。同意を得た学級編制の変更についても、また」を「届け出なければならない。届け出た学級編制を変更したときも、」に改める。

第六条に次の一項を加える。

2 第七条第一項第一号から第三号まで及び第三項、第八条第一号並びに第九条第一号から第三号までに規定する学級の数は、第三条第二項の規定により都道府県の教育委員会が定めた基準により算定するものとする。

第七条第二項中「又は教育課程」を「、教育課程」に改め、「開設される場合」の下に「又は専門的な知識若しくは技能に係る教科等（小学校の教科等に限る。）」に関し専門的な指導が行われる場合」を加え、同項に後段として次のように加える。

この場合において、当該政令で定める数については、当該学校の校長及び当該学校を設置する地方公共団体の教育委員会の意向を踏まえ、当該学校において児童又は生徒の心身の発達に配慮し個性に応じた教育を行うのに必要かつ十分なものとなるよう努めなければならない。

第十条に次の一項を加える。

2 第十一条第一項第一号、第二号及び第四号並びに第二項に規定する学級の数は、第三条第三項の規定により都道府県の教育委員会が定めた基準により算定するものとする。

第十五条に後段として次のように加える。

この場合において、当該政令で定める数については、公立の義務教育諸学校の校長及び当該学校を設置する地方公共団体の教育委員会の意向を踏まえ、当該事情に対応するため必要かつ十分なものとなるよう努めなければならない。

第十五条第二号中「若しくは中等教育学校」を「又は中等教育学校」に改め、「又は聴覚障害者である児童若しくは生徒に対する教育を主として行う特別支援学校の小学部若しくは中学部」を削り、「又は生徒」の下に「（障害のある児童又は生徒を除く。）」を加え、同条第五号を同条第六号とし、同条第四号を同条第五号とし、同条第三号を同条第四号とし、同条第二号の次に次の一号を加える。

三 障害のある児童又は生徒に対する特別の指導が行われていることその他当該学校において、障害のある児童又は生徒に対する指導体制の整備を行うことについて特別の配慮を必要とする事情として政令で定めるもの

第十八条中「第六条及び第十条」を「第六条第一項及び第十条第一項」に改める。

（地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部改正）

第二条 地方教育行政の組織及び運営に関する法律（昭和三十一年法律第百六十二号）の一部を次のように

改正する。

第四十一条第二項中「市町村委員会の意見をきいて」を「、当該市町村における児童又は生徒の実態、当該市町村が設置する学校の学級編制に係る事情等を総合的に勘案して」に改め、同条に次の一項を加える。

3 前項の場合において、都道府県委員会は、あらかじめ、市町村委員会の意見を聴き、その意見を十分に尊重しなければならない。

#### 附 則

##### (施行期日)

1 この法律は、平成二十三年四月一日又はこの法律の公布の日のいずれか遅い日から施行する。ただし、附則第六項の規定は公布の日から、第一条中公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律第四条から第六条まで、第十条及び第十八条の改正規定並びに第二条並びに附則第八項の規定は平成二十四年四月一日から施行する。

##### (検討等)

2 政府は、この法律の施行後、豊かな人間性を備えた創造的な人材を育成する上で義務教育水準の維持向上を図ることが重要であることに鑑み、公立の義務教育諸学校（公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律第二条第一項に規定する義務教育諸学校をいう。以下同じ。）における教育の状況その他の事情を勘案しつつ、これらの学校の学級規模及び教職員の配置の適正化に関し、公立の小学校の第二学年から第六学年まで及び中学校（中等教育学校の前期課程を含む。）に係る学級編制の標準を順次に改定することその他の措置を講ずることについて検討を行い、その結果に基づいて法制上の措置その他の必要な措置を講ずるものとする。

3 政府は、前項の措置を講ずるに当たっては、これに必要な安定した財源の確保に努めるものとする。

4 公立の義務教育諸学校の学級編制並びに教職員の任免等及び定数の在り方については、この法律の施行後、この法律の施行状況等を勘案し、教育上の諸課題に適切に対応するため、きめ細かな指導の一層の充実等を図る観点から、その全般に関し検討が加えられ、その結果に基づいて所要の措置が講じられるものとする。

（児童又は生徒の実態を考慮した学級編制を行う場合における教職員定数に関する特別の配慮）

5 第一条の規定による改正前又は改正後の公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律第四条の規定により公立の義務教育諸学校を設置する地方公共団体の教育委員会が当該学校の学級編制を行うに当たり、障害のある児童又は生徒に対する特別の指導を必要とする事情、小学校において専門的な知識又は技能に係る教科等に関し専門的な指導を必要とする事情、平成二十三年東北地方太平洋沖地震に係る教職員定数の特別措置を必要とする事情その他の当該学校の児童又は生徒の実態を考慮して、第一条の規定による改正後の同法（以下「新標準法」という。）第三条第二項の規定により小学校の第一学年の児童で編制する学級に係る一学級の児童の数に関して都道府県の教育委員会が定めた基準によらないこととした特段の事情がある場合においては、都道府県の教育委員会は、教職員の定数に関し、教育上特別の配慮をすることができ。

（平成二十三年東北地方太平洋沖地震に係る教職員定数の特別措置）

6 平成二十三年東北地方太平洋沖地震により被害を受けた地域に所在する公立の義務教育諸学校（当該地震後に、被災した児童又は生徒が転学した公立の義務教育諸学校を含む。）において、被災した児童又は生徒に関し、学習に対する支援を行うこと、心身の健康の回復のための特別の指導を行うこと等が喫緊の

課題になっている事情に鑑み、国及び当該学校が所在する都道府県の教育委員会は、当該学校の教職員の定数に関し、当該事情に迅速かつ的確に対応するため必要な特別の措置を講ずるものとする。

（平成二十三年度における義務教育費国庫負担法等の規定の適用）

7 附則第一項の規定によりこの法律の施行の日が公布の日とされた場合は、平成二十三年度においては、新標準法第三条第二項の規定が平成二十三年四月一日から適用されたものとみなして、義務教育費国庫負担法（昭和二十七年法律第三百三号）その他の法令の規定を適用するものとする。

（市町村立学校職員給与負担法の一部改正）

8 市町村立学校職員給与負担法（昭和二十三年法律第三百三十五号）の一部を次のように改正する。  
第一条第一号中「第六条」を「第六条第一項」に、「第十条」を「第十条第一項」に改める。

政令第百五号

公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律施行令の一部を改正する政令

内閣は、公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律及び地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律（平成二十三年法律第十九号）の施行に伴い、並びに公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律（昭和三十三年法律第十六号）第七条第二項及び第十五条の規定に基づき、この政令を制定する。

公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律施行令（昭和三十三年政令第二百二号）の一部を次のように改正する。

第二条中「係る生徒の数」の下に「、小学校において行われる専門的な知識又は技能に係る教科等に関する専門的な指導に係る授業時数及び児童の数」を加える。

第五条第二項中第一号を削り、第二号を第一号とし、第三号を第二号とし、同項第四号中「第四項」を「第六項」に改め、同号を同項第三号とし、同項第五号を削り、同条第五項中「第十五条第五号」を「第十五条第六号」に改め、同項を同条第六項とし、同条第四項中「第十五条第四号」を「第十五条第五号」に改め



、同項を同条第五項とし、同条第三項中「第十五条第三号」を「第十五条第四号」に改め、同項を同条第四項とし、同条第二項の次に次の一項を加える。

3 法第十五条第三号の政令で定める事情は、特別支援学校の小学部又は中学部について、当該学校に対する学校教育法第七十四条の要請の状況並びに当該学校の規模、教職員の配置の状況その他の組織及び運営の状況を勘案し、当該学校が当該要請に応じて同条の責務を十分に果たすことができるよう、当該学校の人的体制の整備を行うことが特に必要であると認められることとし、法第十五条の規定により教職員の数を加える場合においては、同号に規定する特別の指導が行われる学校及び当該整備を行うことが特に必要であると認められる学校の数等を考慮して文部科学大臣が定める数を法第七条又は第十一条の規定により算定した数に加えるものとする。

#### 附 則

この政令は、公布の日から施行する。

公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律等に基づく文部科学大臣の定めについて（昭和四十四年八月七日文部大臣裁定）の一部改正について

平成二十三年四月二十二日

文部科学大臣 裁定

公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律等に基づく文部科学大臣の定めについて（昭和四十四年八月七日文部大臣裁定）の一部を次のように改正する。

記2中「履修に係る生徒の数」の下に「、小学校において行われる専門的な知識又は技能に係る教科等に関する専門的な指導に係る授業時数及び児童の数」を加える。

記3及び記4を削り、記5を記3とし、同項の次に次の一項を加える。

4 令第五条第三項の文部科学大臣が定める数は、法第一五条第三号に規定する特別の指導が行われる学校及び同項に規定する人的体制の整備を行うことが特に必要であると認められる学校の数等を基礎として予

算の範囲内で別に定める数とする。

記6中「第五条第三項」を「第五条第四項」に改め、同項を記5とし、記7中「第五条第四項」を「第五条第五項」に改め、同項を記6とし、記8中「第五条第五項」を「第五条第六項」に改め、同項を記7とし、記9中「第五条第五項」を「第五条第六項」に、「8」を「7」に改め、同項を記8とし、記10を記9とする。

## 附 則

この定めは、平成二十三年四月二十二日から適用する。

○ 公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律（昭和三十三年法律第十六号）

（傍線の部分は改正部分）

改正後

現行

（学級編制の標準）

第三条（略）

2 各都道府県ごとの、公立の小学校又は中学校（中等教育学校の前期課程を含む。）の小学級の児童又は生徒の数の基準は、次の表の上欄に掲げる学校の種類及び同表の中欄に掲げる学級編制の区分に応じ、同表の下欄に掲げる数を標準として、都道府県の教育委員会が定める。ただし、都道府県の教育委員会は、当該都道府県における児童又は生徒の実態を考慮して特に必要があると認める場合については、この項本文の規定により定める数を下回る数を、当該場合に係る小学級の児童又は生徒の数の基準として定めることができる。

（学級編制の標準）

第三条（略）

2 各都道府県ごとの、公立の小学校又は中学校（中等教育学校の前期課程を含む。）の小学級の児童又は生徒の数の基準は、次の表の上欄に掲げる学校の種類及び同表の中欄に掲げる学級編制の区分に応じ、同表の下欄に掲げる数を標準として、都道府県の教育委員会が定める。ただし、都道府県の教育委員会は、当該都道府県における児童又は生徒の実態を考慮して特に必要があると認める場合については、この項本文の規定により定める数を下回る数を、当該場合に係る小学級の児童又は生徒の数の基準として定めることができる。

<table border="1"> <tr> <td>小学校</td> <td>学校の種類</td> </tr> <tr> <td>同学年の児童で編制する学級</td> <td>学級編制の区分</td> </tr> <tr> <td>四十人（第一学年の児童で編制する学級にあつては、</td> <td>小学級の児童又は生徒の数</td> </tr> </table>		小学校	学校の種類	同学年の児童で編制する学級	学級編制の区分	四十人（第一学年の児童で編制する学級にあつては、	小学級の児童又は生徒の数	<p>（学級編制の標準）</p> <p>第三条（略）</p> <p>2 各都道府県ごとの、公立の小学校又は中学校（中等教育学校の前期課程を含む。）の小学級の児童又は生徒の数の基準は、次の表の上欄に掲げる学校の種類及び同表の中欄に掲げる学級編制の区分に応じ、同表の下欄に掲げる数を標準として、都道府県の教育委員会が定める。ただし、都道府県の教育委員会は、当該都道府県における児童又は生徒の実態を考慮して特に必要があると認める場合については、この項本文の規定により定める数を下回る数を、当該場合に係る小学級の児童又は生徒の数の基準として定めることができる。</p>
小学校	学校の種類							
同学年の児童で編制する学級	学級編制の区分							
四十人（第一学年の児童で編制する学級にあつては、	小学級の児童又は生徒の数							
<table border="1"> <tr> <td>小学校</td> <td>学校の種類</td> </tr> <tr> <td>同学年の児童で編制する学級</td> <td>学級編制の区分</td> </tr> <tr> <td>四十人</td> <td>小学級の児童又は生徒の数</td> </tr> </table>		小学校	学校の種類	同学年の児童で編制する学級	学級編制の区分	四十人	小学級の児童又は生徒の数	
小学校	学校の種類							
同学年の児童で編制する学級	学級編制の区分							
四十人	小学級の児童又は生徒の数							

中学校（ 中等教育 学校の前 期課程を 含む。）	同学年の生徒で編制する学級 二の学年の生徒で編制する学級 学校教育法第八十一条第二項及び第 三項に規定する特別支援学級	四十人 八人 八人
	二の学年の児童で編制する学級 学校教育法第八十一条第二項及び第 三項に規定する特別支援学級	三十五人 十六人（第一 学年の児童を 含む学級にあ つては、八人 ） 八人

3 (略)

(学級編制)

第四条 公立の義務教育諸学校の学級編制は、前条第二項又は第三項の規定により都道府県の教育委員会が定めた基準を標準として、当該学校を設置する地方公共団体の教育委員会が、当該学校の児童又は生徒の実態を考慮して行う。

(学級編制についての都道府県の教育委員会への届出)

中学校（ 中等教育 学校の前 期課程を 含む。）	同学年の生徒で編制する学級 二の学年の生徒で編制する学級 学校教育法第八十一条第二項及び第 三項に規定する特別支援学級	四十人 八人 八人
	二の学年の児童で編制する学級 学校教育法第八十一条第二項及び第 三項に規定する特別支援学級	十六人（第一 学年の児童を 含む学級にあ つては、八人 ） 八人

3 (略)

(学級編制)

第四条 公立の義務教育諸学校の学級編制は、前条第二項又は第三項の規定により都道府県の教育委員会が定めた基準に従い、当該学校を設置する地方公共団体の教育委員会が行う。

(学級編制についての都道府県の教育委員会の同意)

第五条 市（特別区を含む。第八条第三号並びに第八条の二第一号及び第二号において同じ。）町村の教育委員会は、毎学年、当該市町村の設置する義務教育諸学校に係る前条の学級編制を行ったときは、遅滞なく、都道府県の教育委員会に届け出なければならない。届け出た学級編制を変更したときも、同様とする。

（小中学校等教職員定数の標準）

第六条 各都道府県ごとの、公立の小学校及び中学校並びに中等教育学校の前期課程（学校給食法第六条に規定する施設を含む。）に置くべき教職員の総数（以下「小中学校等教職員定数」という。）は、次条、第七条第一項及び第二項並びに第八条から第九条までに規定する数を合計した数を標準として定めるものとする。この場合において、それぞれ、当該各条に規定する数を標準として、当該各条に定める教職員の職の種類の区分ごとの総数を定めなければならない。

2 第七条第一項第一号から第三号まで及び第三項、第八条第一号並びに第九条第一号から第三号までに規定する学級の数は、第三条第二項の規定により都道府県の教育委員会が定めた基準により算定するものとする。

第七条（略）

2 小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程において、児童又は生徒の心身の発達に配慮し個性に応じた教育を行うため、複数の教頭及び教諭等の協力による指導が行われる場合、少数の児童

第五条 市（特別区を含む。第八条第三号並びに第八条の二第一号及び第二号において同じ。）町村の教育委員会は、毎学年、当該市町村の設置する義務教育諸学校に係る前条の学級編制について、あらかじめ、都道府県の教育委員会に協議し、その同意を得なければならない。同意を得た学級編制の変更についても、また同様とする。

（小中学校等教職員定数の標準）

第六条 各都道府県ごとの、公立の小学校及び中学校並びに中等教育学校の前期課程（学校給食法第六条に規定する施設を含む。）に置くべき教職員の総数（以下「小中学校等教職員定数」という。）は、次条、第七条第一項及び第二項並びに第八条から第九条までに規定する数を合計した数を標準として定めるものとする。この場合において、それぞれ、当該各条に規定する数を標準として、当該各条に定める教職員の職の種類の区分ごとの総数を定めなければならない。

（新設）

第七条（略）

2 小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程において、児童又は生徒の心身の発達に配慮し個性に応じた教育を行うため、複数の教頭及び教諭等の協力による指導が行われる場合、少数の児童

若しくは生徒により構成される集団を単位として指導が行われる場合、教育課程（小学校の教育課程を除く。）の編成において多様な選択教科が開設される場合又は専門的な知識若しくは技能に係る教科等（小学校の教科等に限り。）に関し専門的な指導が行われる場合には、前項の規定により算定した数に政令で定める数を加えた数を教頭及び教諭等の数とする。この場合において、当該政令で定める数については、当該学校の校長及び当該学校を設置する地方公共団体の教育委員会の意向を踏まえ、当該学校において児童又は生徒の心身の発達に配慮し個性に応じた教育を行うのに必要かつ十分なものとなるよう努めなければならない。

### 3 (略)

(特別支援学校教職員定数の標準)

第十条 各都道府県ごとの、公立の特別支援学校の小学部及び中学部に置くべき教職員の総数（以下「特別支援学校教職員定数」という。）は、次条、第十一条第一項及び第十二条から第十四条までに規定する数を合計した数を標準として定めるものとする。

2 第十一条第一項第一号、第二号及び第四号並びに第二項に規定する学級の数は、第三条第三項の規定により都道府県の教育委員会が定めた基準により算定するものとする。

(教職員定数の算定に関する特例)

第十五条 第七条から第九条まで及び第十一条から前条までの規定により教頭及び教諭等、養護教諭等、栄養教諭等、寄宿舎指導員並び

若しくは生徒により構成される集団を単位として指導が行われる場合又は教育課程（小学校の教育課程を除く。）の編成において多様な選択教科が開設される場合には、前項の規定により算定した数に政令で定める数を加えた数を教頭及び教諭等の数とする。

(特別支援学校教職員定数の標準)

第十条 各都道府県ごとの、公立の特別支援学校の小学部及び中学部に置くべき教職員の総数（以下「特別支援学校教職員定数」という。）は、次条、第十一条第一項及び第十二条から第十四条までに規定する数を合計した数を標準として定めるものとする。

(新設)

(教職員定数の算定に関する特例)

第十五条 第七条から第九条まで及び第十一条から前条までの規定により教頭及び教諭等、養護教諭等、栄養教諭等、寄宿舎指導員並び

に事務職員の数を算定する場合において、次に掲げる事情があるときは、これらの規定により算定した数に、それぞれ政令で定める数を加えるものとする。この場合において、当該政令で定める数については、公立の義務教育諸学校の校長及び当該学校を設置する地方公共団体の教育委員会の意向を踏まえ、当該事情に対応するため必要かつ十分なものとなるよう努めなければならない。

- 一 (略)
- 二 小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程（第八条の二第三号の規定により栄養教諭等の数を算定する場合にあつては、共同調理場に係る小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程とする。）において教育上特別の配慮を必要とする児童又は生徒（障害のある児童又は生徒を除く。）に対する特別の指導であつて政令で定めるものが行われていること。

三 障害のある児童又は生徒に対する特別の指導が行われていることその他当該学校において、障害のある児童又は生徒に対する指導体制の整備を行うことについて特別の配慮を必要とする事情として政令で定めるもの

- 四 (略)
- 五 (略)
- 六 (略)

(教職員定数に含まない数)

第十八条 第六条第一項及び第十条第一項の規定による小中学校等教

に事務職員の数を算定する場合において、次に掲げる事情があるときは、これらの規定により算定した数に、それぞれ政令で定める数を加えるものとする。

- 一 (略)
- 二 小学校若しくは中学校若しくは中等教育学校の前期課程（第八条の二第三号の規定により栄養教諭等の数を算定する場合にあつては、共同調理場に係る小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程とする。）又は聴覚障害者である児童若しくは生徒に対する教育を主として行う特別支援学校の小学部若しくは中学部において教育上特別の配慮を必要とする児童又は生徒に対する特別の指導であつて政令で定めるものが行われていること。

(新設)

- 三 (略)
- 四 (略)
- 五 (略)

(教職員定数に含まない数)

第十八条 第六条及び第十条の規定による小中学校等教職員定数及び



職員定数及び特別支援学校教職員定数には、次に掲げる者に係るものを含まないものとする。

一〇五 (略)

特別支援学校教職員定数には、次に掲げる者に係るものを含まないものとする。

一〇五 (略)

改正後	現行
<p>（県費負担教職員の定数）</p> <p>第四十一条 県費負担教職員の定数は、都道府県の条例で定める。ただし、臨時又は非常勤の職員については、この限りでない。</p> <p>2 県費負担教職員の市町村別の学校の種類ごとの定数は、前項の規定により定められた定数の範囲内で、<u>都道府県委員会が、当該市町村における児童又は生徒の実態、当該市町村が設置する学校の学級編制に係る事情等を総合的に勘案して定める。</u></p> <p>3 前項の場合において、<u>都道府県委員会は、あらかじめ、市町村委員会</u>の意見を聴き、その意見を十分に尊重しなければならない。</p>	<p>（県費負担教職員の定数）</p> <p>第四十一条 県費負担教職員の定数は、都道府県の条例で定める。ただし、臨時又は非常勤の職員については、この限りでない。</p> <p>2 県費負担教職員の市町村別の学校の種類ごとの定数は、前項の規定により定められた定数の範囲内で、<u>都道府県委員会が市町村委員会の意見をきいて定める。</u></p> <p>（新設）</p>

○市町村立学校職員給与負担法（昭和二十三年法律第三百三十五号）

（傍線の部分は改正部分）

改正後	現行
<p>第一条 市（特別区を含む。）町村立の小学校、中学校、中等教育学校の前期課程及び特別支援学校の校長（中等教育学校の前期課程にあつては、当該課程の属する中等教育学校の校長とする。）、副校長、教頭、主幹教諭、指導教諭、教諭、養護教諭、栄養教諭、助教諭、養護助教諭、寄宿舎指導員、講師（常勤の者及び地方公務員法（昭和二十五年法律第二百六十一号）第二十八条の五第一項に規定する短時間勤務の職を占める者に限る）、学校栄養職員（学校給食法（昭和二十九年法律第六十号）第七条に規定する職員のうち栄養の指導及び管理をつかさどる主幹教諭並びに栄養教諭以外の者を含む。）、同法第六条に規定する施設の当該職員を含む。以下同じ。）及び事務職員のうち次に掲げる職員であるものの給料、扶養手当、地域手当、住居手当、初任給調整手当、通勤手当、単身赴任手当、特殊勤務手当、特勤手当（これに準ずる手当を含む。）、へき地手当（これに準ずる手当を含む。）、時間外勤務手当（学校栄養職員及び事務職員に係るものとする。）、宿日直手当、管理職員特別勤務手当、管理職手当、期末手当、勤勉手当、義務教育等教員特別手当、寒冷地手当、特定任期付職員業績手当、退職手当、退職年金及び退職一時金並びに旅費（都道府県が定める支給に関する基準に適合するものに限る。）（以下「給料その他の給与」という。）</p>	<p>第一条 市（特別区を含む。）町村立の小学校、中学校、中等教育学校の前期課程及び特別支援学校の校長（中等教育学校の前期課程にあつては、当該課程の属する中等教育学校の校長とする。）、副校長、教頭、主幹教諭、指導教諭、教諭、養護教諭、栄養教諭、助教諭、養護助教諭、寄宿舎指導員、講師（常勤の者及び地方公務員法（昭和二十五年法律第二百六十一号）第二十八条の五第一項に規定する短時間勤務の職を占める者に限る）、学校栄養職員（学校給食法（昭和二十九年法律第六十号）第七条に規定する職員のうち栄養の指導及び管理をつかさどる主幹教諭並びに栄養教諭以外の者を含む。）、同法第六条に規定する施設の当該職員を含む。以下同じ。）及び事務職員のうち次に掲げる職員であるものの給料、扶養手当、地域手当、住居手当、初任給調整手当、通勤手当、単身赴任手当、特殊勤務手当、特勤手当（これに準ずる手当を含む。）、へき地手当（これに準ずる手当を含む。）、時間外勤務手当（学校栄養職員及び事務職員に係るものとする。）、宿日直手当、管理職員特別勤務手当、管理職手当、期末手当、勤勉手当、義務教育等教員特別手当、寒冷地手当、特定任期付職員業績手当、退職手当、退職年金及び退職一時金並びに旅費（都道府県が定める支給に関する基準に適合するものに限る。）（以下「給料その他の給与」という。）</p>

並びに定時制通信教育手当（中等教育学校の校長に係るものとする。）並びに講師（公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律（昭和三十三年法律第百十六号。以下「義務教育諸学校標準法」という。）第十七条第二項に規定する非常勤の講師に限る。）の報酬及び職務を行うために要する費用の弁償（次条において「報酬等」という。）は、都道府県の負担とする。

一 義務教育諸学校標準法第六条第一項の規定に基づき都道府県が定める小中学校等教職員定数及び義務教育諸学校標準法第十条第一項の規定に基づき都道府県が定める特別支援学校教職員定数に基づき配置される職員（義務教育諸学校標準法第十八条各号に掲げる者を含む。）

二・三（略）

並びに定時制通信教育手当（中等教育学校の校長に係るものとする。）並びに講師（公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律（昭和三十三年法律第百十六号。以下「義務教育諸学校標準法」という。）第十七条第二項に規定する非常勤の講師に限る。）の報酬及び職務を行うために要する費用の弁償（次条において「報酬等」という。）は、都道府県の負担とする。

一 義務教育諸学校標準法第六条の規定に基づき都道府県が定める小中学校等教職員定数及び義務教育諸学校標準法第十条の規定に基づき都道府県が定める特別支援学校教職員定数に基づき配置される職員（義務教育諸学校標準法第十八条各号に掲げる者を含む。）

二・三（略）

改 正 後	現 行
<p>（複数の教頭及び教諭等の協力による指導が行われる場合等における教頭及び教諭等の数の算定）</p> <p>第二条 法第七条第二項の政令で定める数は、都道府県の教育委員会が小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程において行われる複数の教頭及び教諭等（同条第一項に規定する教頭及び教諭等をいう。以下この条及び第七条において同じ。）の協力による指導に係る授業時数及び児童又は生徒の数、小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程において行われる少数の児童又は生徒により構成される集団を単位とした指導に係る授業時数及び児童又は生徒の数、中学校又は中等教育学校の前期課程において開設される選択教科の数及び授業時数並びに当該選択教科の履修に係る生徒の数、小学校において行われる専門的な知識又は技能に係る教科等に関する専門的な指導に係る授業時数及び児童の数その他の事情を勘案して教頭及び教諭等を置くことについての配慮を必要とすると認める学校の数等を考慮し、文部科学大臣が定める数とする。</p> <p>（教職員定数の算定に関する特例）</p> <p>第五条 （略）</p> <p>2 法第十五条第二号の政令で定める特別の指導は、次の各号に掲げ</p>	<p>（複数の教頭及び教諭等の協力による指導が行われる場合等における教頭及び教諭等の数の算定）</p> <p>第二条 法第七条第二項の政令で定める数は、都道府県の教育委員会が小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程において行われる複数の教頭及び教諭等（同条第一項に規定する教頭及び教諭等をいう。以下この条及び第七条において同じ。）の協力による指導に係る授業時数及び児童又は生徒の数、小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程において行われる少数の児童又は生徒により構成される集団を単位とした指導に係る授業時数及び児童又は生徒の数、中学校又は中等教育学校の前期課程において開設される選択教科の数及び授業時数並びに当該選択教科の履修に係る生徒の数を必要とすると認める学校の数等を考慮し、文部科学大臣が定める数とする。</p> <p>（教職員定数の算定に関する特例）</p> <p>第五条 （略）</p> <p>2 法第十五条第二号の政令で定める特別の指導は、次の各号に掲げ</p>

る指導とし、同条の規定により教職員の数を加える場合においては、それぞれ当該各号に掲げる数を当該各号に掲げる法の規定により算定した数に加えるものとする。

(削除)

一 小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程において、学習指導上、生徒指導上又は進路指導上特別の配慮が必要と認められる事情を有する児童又は生徒に対して当該事情に応じた特別の指導が行われる場合にあつては、当該指導が行われる学校の数等を考慮して文部科学大臣が定める数 第七条

二 小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程において、心身の健康を害している児童又は生徒に対してその回復のための特別の指導が行われる場合にあつては、当該指導が行われる学校の数等を考慮して文部科学大臣が定める数 第八条

三 小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程（法第八条の二第三号の規定により栄養教諭等（同条に規定する栄養教諭等をいう。第七条第一項において同じ。）の数を算定する場合にあつては、共同調理場（学校給食法（昭和二十九年法律第六十号）第六条に規定する施設をいう。第六項及び第七条第一項にお

る指導とし、同条の規定により教職員の数を加える場合においては、それぞれ当該各号に掲げる数を当該各号に掲げる法の規定により算定した数に加えるものとする。

一 小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程において、文部科学大臣が定める障害を有する児童又は生徒（学校教育法第八十一条第二項及び第三項に規定する特別支援学級（第五号において「特別支援学級」という。）の児童及び生徒を除く。）に対して当該障害に応じた特別の指導が行われる場合にあつては、当該指導が行われる学校の数等を考慮して文部科学大臣が定める数 第七条

二 小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程において、学習指導上、生徒指導上又は進路指導上特別の配慮が必要と認められる事情を有する児童又は生徒に対して当該事情に応じた特別の指導が行われる場合にあつては、当該指導が行われる学校の数等を考慮して文部科学大臣が定める数 第七条

三 小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程において、心身の健康を害している児童又は生徒に対してその回復のための特別の指導が行われる場合にあつては、当該指導が行われる学校の数等を考慮して文部科学大臣が定める数 第八条

四 小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程（法第八条の二第三号の規定により栄養教諭等（同条に規定する栄養教諭等をいう。第七条第一項において同じ。）の数を算定する場合にあつては、共同調理場（学校給食法（昭和二十九年法律第六十号）第六条に規定する施設をいう。第四項及び第七条第一項にお

て同じ。)に係る小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程とする。)において、著しく肥満している児童又は生徒その他の飲食に関して特別の注意が必要である児童又は生徒に対して食生活の改善のための特別の指導が行われる場合にあつては、当該指導が行われる学校の数等を考慮して文部科学大臣が定める数

第八条の二

(削除)

て同じ。)に係る小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程とする。)において、著しく肥満している児童又は生徒その他の飲食に関して特別の注意が必要である児童又は生徒に対して食生活の改善のための特別の指導が行われる場合にあつては、当該指導が行われる学校の数等を考慮して文部科学大臣が定める数

第八条の二

五 聴覚障害者である児童又は生徒に対する教育を主として行う特別支援学校の小学部又は中学部において、小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程の児童又は生徒(特別支援学級の児童及び生徒を除く。)で文部科学大臣が定める障害を有するものに対して当該障害に応じた特別の指導が行われる場合にあつては、当該指導が行われる学校の数等を考慮して文部科学大臣が定める数 第十一条

(新設)

3 法第十五条第三号の政令で定める事情は、特別支援学校の小学部又は中学部について、当該学校に対する学校教育法第七十四条の要請の状況並びに当該学校の規模、教職員の配置の状況その他の組織及び運営の状況を勘案し、当該学校が当該要請に応じて同条の責務を十分に果たすことができるよう、当該学校の人的体制の整備を行うことが特に必要であると認められることとし、法第十五条の規定により教職員の数を加える場合においては、同号に規定する特別の指導が行われる学校及び当該整備を行うことが特に必要であると認められる学校の数等を考慮して文部科学大臣が定める数を法第七条又は第十一条の規定により算定した数に加えるものとする。

4 法第十五条第四号の政令で定める事情は、主幹教諭(養護又は栄

3 法第十五条第三号の政令で定める事情は、主幹教諭(養護又は栄

養の指導及び管理をつかさどる主幹教諭を除く。)を置く小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程について、当該主幹教諭の職務の内容並びに当該学校の規模、教職員の配置の状況その他の組織及び運営の状況を勘案し、当該学校の効果的かつ効率的な運営を図るため、当該主幹教諭がその校務の整理に係る職責を十分に果たすことができるよう、当該学校の人的体制の整備を行うことが特に必要であると認められることとし、同条の規定により教職員の数を加える場合においては、当該整備を行うことが特に必要であると認められる学校の数等を考慮して文部科学大臣が定める数を法第七条の規定により算定した数に加えるものとする。

5| 法第十五条第五号の政令で定める事情は、小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程について、当該学校を含む複数の義務教育諸学校において多様な人材の活用、情報化の促進等により多様な教育が行われる場合に当該学校がそのための事務処理の拠点となつていふこととし、同条の規定により教職員の数を加える場合においては、当該拠点となつていふ学校の数等を考慮して文部科学大臣が定める数を法第九条の規定により算定した数に加えるものとする。

6| 法第十五条第六号の政令で定める特別の事情は、当該学校の教職員が同号に規定する研修を受けていふこと、当該学校(共同調理場を含む。)において文部科学大臣が定める教育指導の改善若しくは事務処理の効率化に関する特別な研究が行われていふこと又は当該学校の教職員が教育公務員特例法(昭和二十四年法律第一号)第二十三条第一項の初任者研修若しくは同法第二十五条の二第一項の指

養の指導及び管理をつかさどる主幹教諭を除く。)を置く小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程について、当該主幹教諭の職務の内容並びに当該学校の規模、教職員の配置の状況その他の組織及び運営の状況を勘案し、当該学校の効果的かつ効率的な運営を図るため、当該主幹教諭がその校務の整理に係る職責を十分に果たすことができるよう、当該学校の人的体制の整備を行うことが特に必要であると認められることとし、同条の規定により教職員の数を加える場合においては、当該整備を行うことが特に必要であると認められる学校の数等を考慮して文部科学大臣が定める数を法第七条の規定により算定した数に加えるものとする。

4| 法第十五条第四号の政令で定める事情は、小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程について、当該学校を含む複数の義務教育諸学校において多様な人材の活用、情報化の促進等により多様な教育が行われる場合に当該学校がそのための事務処理の拠点となつていふこととし、同条の規定により教職員の数を加える場合においては、当該拠点となつていふ学校の数等を考慮して文部科学大臣が定める数を法第九条の規定により算定した数に加えるものとする。

5| 法第十五条第五号の政令で定める特別の事情は、当該学校の教職員が同号に規定する研修を受けていふこと、当該学校(共同調理場を含む。)において文部科学大臣が定める教育指導の改善若しくは事務処理の効率化に関する特別な研究が行われていふこと又は当該学校の教職員が教育公務員特例法(昭和二十四年法律第一号)第二十三条第一項の初任者研修若しくは同法第二十五条の二第一項の指



導改善研修を受けていることとし、法第十五条の規定により教職員の数を加える場合においては、当該学校（共同調理場を含む。）の数を考慮して文部科学大臣が定める数を法第七条から第九条まで又は法第十一条の規定により算定した数に加えるものとする。

導改善研修を受けていることとし、法第十五条の規定により教職員の数を加える場合においては、当該学校（共同調理場を含む。）の数を考慮して文部科学大臣が定める数を法第七条から第九条まで又は法第十一条の規定により算定した数に加えるものとする。

○公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律等に基づく文部科学大臣の定めについて（昭和四十四年八月七日文部大臣裁定）

（傍線部分は改正部分）

改正後	改正前
<p>1 (略)</p> <p>2 令第二条の文部科学大臣が定める数は、都道府県の教育委員会が小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程において行われる複数の教頭及び教諭等の協力による指導に係る授業時数及び児童又は生徒の数、小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程において行われる少数の児童又は生徒により構成される集団を単位とした指導に係る授業時数及び児童又は生徒の数、中学校（中等教育学校の前期課程を含む。）において開設される選択教科の数及び授業時数並びに当該選択教科の履修に係る生徒の数、小学校において行われる専門的な知識又は技能に係る教科等に関する専門的な指導に係る授業時数及び児童の数の他の事情を勘案して教頭及び教諭等を置くことについての配慮を必要とする</p> <p>と認める学校の数等を基礎として予算の範囲内で別に定める数とする。</p> <p>(削除)</p> <p>(削除)</p> <p>3 令第五条第二項の文部科学大臣が定める数は、同項各号に規定する特別の指導が行われる学校の数及び当該指導を受ける児童又は生徒の数等を基礎として予算の範囲内で別に定める数とする。</p>	<p>1 (略)</p> <p>2 令第二条の文部科学大臣が定める数は、都道府県の教育委員会が小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程において行われる複数の教頭及び教諭等の協力による指導に係る授業時数及び児童又は生徒の数、小学校若しくは中学校又は中等教育学校の前期課程において行われる少数の児童又は生徒により構成される集団を単位とした指導に係る授業時数及び児童又は生徒の数、中学校（中等教育学校の前期課程を含む。）において開設される選択教科の数及び授業時数並びに当該選択教科の履修に係る生徒の数の他の事情を勘案して教頭及び教諭等を置くことについての配慮を必要とする</p> <p>と認める学校の数等を基礎として予算の範囲内で別に定める数とする。</p> <p>3 令第五条第二項第一号の文部科学大臣が定める障害は、学校教育法施行規則（昭和二十二年文部省令第一号）第一四〇条各号に掲げる者の障害とする。</p> <p>4 令第五条第二項第五号の文部科学大臣が定める障害は、学校教育法施行規則第一四〇条第一号及び第四号に掲げる者の障害とする。</p> <p>5 令第五条第二項の文部科学大臣が定める数は、同項各号に規定する特別の指導が行われる学校の数及び当該指導を受ける児童又は生徒の数等を基礎として予算の範囲内で別に定める数とする。</p>

4 令第五条第三項の文部科学大臣が定める数は、法第一五条第三号に規定する特別の指導が行われる学校及び同項に規定する人的体制の整備を行うことが特に必要であると認められる学校の数等を基礎として予算の範囲内で別に定める数とする。

5 令第五条第四項の文部科学大臣が定める数は、同項に規定する人的体制の整備を行うことが特に必要であると認められる学校の数等を基礎として予算の範囲内で別に定める数とする。

6 令第五条第五項の文部科学大臣が定める数は、同項に規定する事務処理の拠点となつていゝる学校の数等を基礎として予算の範囲内で別に定める数とする。

7 令第五条第六項の文部科学大臣が定める研究は、次に掲げる要項等に基づき学校において行われる研究とする。

ア 教育課程研究指定校事業実施要項

イ 教育研究開発実施要項

ウ 魅力ある学校づくり調査研究事業実施要項

エ 「コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）の推進への取組

― 実施要領

オ 指導に課題のある教員等に対する人事管理に関する調査研究事業実施要項

カ 特別支援教育総合推進事業委託要項

キ 都道府県の教育委員会が定める研究指定校の実施に係る要項で別に定めるもの

8 令第五条第六項の文部科学大臣が定める数は、7に定める研究が行われている義務教育諸学校の数、教育公務員特例法（昭和二四年法律第一号）第二二条第三項の規定に基づき、任命権者が定めるところにより長期にわたる研修を受けている教職員の数及び同法第二三条第一項の初任

（新設）

6 令第五条第三項の文部科学大臣が定める数は、同項に規定する人的体制の整備を行うことが特に必要であると認められる学校の数等を基礎として予算の範囲内で別に定める数とする。

7 令第五条第四項の文部科学大臣が定める数は、同項に規定する事務処理の拠点となつていゝる学校の数等を基礎として予算の範囲内で別に定める数とする。

8 令第五条第五項の文部科学大臣が定める研究は、次に掲げる要項等に基づき学校において行われる研究とする。

ア 教育課程研究指定校事業実施要項

イ 教育研究開発実施要項

ウ 魅力ある学校づくり調査研究事業実施要項

エ 「コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）の推進への取組

― 実施要領

オ 指導に課題のある教員等に対する人事管理に関する調査研究事業実施要項

カ 特別支援教育総合推進事業委託要項

キ 都道府県の教育委員会が定める研究指定校の実施に係る要項で別に定めるもの

9 令第五条第五項の文部科学大臣が定める数は、8に定める研究が行われている義務教育諸学校の数、教育公務員特例法（昭和二四年法律第一号）第二二条第三項の規定に基づき、任命権者が定めるところにより長期にわたる研修を受けている教職員の数及び同法第二三条第一項の初任

者研修又は同法第二五条の二第一項の指導改善研修を受けている教職員の数等を基礎として予算の範囲内で別に定める数とする。

9| 令第八条第三号の文部科学大臣が定める非常勤の講師は、「新たな雇用対策について」（平成二〇年一月九日新たな雇用対策に関する関係閣僚会議決定）における緊急雇用創出事業交付金の対象事業において採用されるものとする。

者研修又は同法第二五条の二第一項の指導改善研修を受けている教職員の数等を基礎として予算の範囲内で別に定める数とする。

10| 令第八条第三号の文部科学大臣が定める非常勤の講師は、「新たな雇用対策について」（平成二〇年一月九日新たな雇用対策に関する関係閣僚会議決定）における緊急雇用創出事業交付金の対象事業において採用されるものとする。